

今だから思う!

人生に「if」は無いと言う。予期せぬ事態が起こってしまった後もまた「if」は無いと思う。だが、この度のコロナ禍において「もし三代目猿之助・現猿翁師匠がまだ舞台上に立てていたなら、3月から大きな痛手を受け続けている歌舞伎興行を、そして演劇を、どのように立て直そうと動くか?」を私は考えずにはいられない。

師匠が創ったスーパー歌舞伎は、今まで歌舞伎に敷居の高さを感じていたお客様に、スピード、スペクタクル、ストーリーの3Sを盛り込み、“歌舞伎は瑞々しいエネルギーの燃焼である”ことを強く印象づけ、今は四代目猿之助にスーパー歌舞伎Ⅱとして受け継がれている。

では、コロナ禍に見舞われた今、再び新しい歌舞伎を作らうか。否、今あるものを最大限に駆使して、低予算でより質の高い作品に昇華させることに力を尽くすと思う。衣裳のリメイク、舞台装置の簡素化、そして脚本を練り上げて上演時間を短くしながらも、よりワクワクする舞

台を作るだろう。創作の過程で誰もが「その手があったか!」と驚く奇想天外なアイデアが生まれる可能性も大いにある。終演後には、お客様が興奮覚めやらぬお顔で劇場を後にする姿が思い浮かぶ。

と、ここまで書いたのは21歳で師匠の弟子になった私の脳内の仮説。ズブの素人、しかも弟子の中で最も不器用な私の下手さ加減に長年辛抱しながら相手役として使い続けてくださった師匠のお考えと、私の仮説の答合わせをお願いした。その結果は「OK!」とのこと。師匠の薫陶を受けた身として、厳しい状況下でも歌舞伎の可能性を信じ、夢を見ずにはいられない。

尚、最後に宣伝をさせていただきます。本年10月17日に『猿翁アーカイブにみる三代目市川猿之助の世界』というフォーラムがございます。テーマは「感動! 師匠が芝居づくりにおいて、最も大切にしていた事でございます。皆様のご来場をお待ち申し上げます。



市川笑也
歌舞伎俳優

1959年生まれ。昭和55年3月に国立劇場第5期歌舞伎俳優研修を終了。4月に国立劇場『絵本合法衛』の中間で初舞台を踏む。昭和56年2月に師匠である現・市川猿翁（三代目市川猿之助）に入門し、二代目市川笑也を名乗る。平成2年2月に市川猿翁の部屋子となる。10年7月歌舞伎座公演『義経千本桜』鳥居前の静御前で名題昇進。

BOOK

公開シンポジウムの記録

「国性爺合戦と鄭成功—東アジアの視点からみたドラマトルギー—」

日本、中国、台湾で17世紀に活躍した実在のヒーロー・鄭成功は、近松門左衛門作『国性爺合戦』の主人公（和藤内）のモデルとして知られており、史実では「抗清復明」の旗印を揚げオランダの東インド会社の統治下にあった台湾に進攻し、占拠中のオランダ人を追放した武人といわれていますが、その評価は日本、中国、台湾、そして時代により異なります。当センターで

は2カ年にわたり台湾・中国での鄭成功像の受容や日本の近代演劇史における「国性爺」の表象について研究を行い、その成果発表として2019年12月に公開シンポジウムを開催。本誌はそれをまとめたもの。ご希望の方は舞台芸術研究センターへ電話またはメールにてお問合せください。

tel. 075-791-9437

k-pac@kua.kyoto-art.ac.jp

